

## ■■■ 狂言村と狂言系 ■■■

### < I >

今日の眼から見ると、ずいぶんとばかばかしい話であるが、地狂言対警察関係が、面倒になった当時の村の世相は、まことに一個の狂言の観があった。若いものが俳優の鑑札を受けて演るか演らぬうちに、追っかけ警察から達しがあつて、申し訳的の鑑札で狂言を演ってはならぬ、鑑札を受けてやった以上そのままの百姓に還つては相成らぬと、真実あつた布告かどうかわからぬが、ともかくも村の人達はそう解して、それは困つたどうしたものかと、思案の果てが元来好きな連中だけに、なに案じることはない、農業もちょうど暇な期だに今少し踊ろまいかで、あられもない地狂言役者が、そろそろと他所村へ興行に出掛けたなどの話がある。南設楽郡海老町〔現、鳳来町〕の一区内のことで、何でも狂言を珍しがる山奥に行くに限ると、北設楽郡内の奥在所へ入り込んだところ、そこそ本場でかえって見物の眼が高く、海老の大根を洗いざらい背負い出して来たかなどとさんざんこき下ろされて、ほうほうのていで還つて来た。しかもその土地が近在中の下手村で通つていただけに始末が悪い。

明治三二年に、私の生まれた村でやった狂言も、今言つたように、警察関係が非常に面倒になった時期であつた。もうどうしてもできぬというのを、えらい苦肉の策をして演つたのである。そのおりの狂言は私もかすかに記憶している。芸題は「御三家三勇士」に「三島おせん」で、村の上の屋敷の総領息子が秀頼公をやつて、下手なのが評判になり、その間の抜けた台詞をわれわれ子供までが口真似て遊んだものであつた。おそらくその年の狂言が、後に復活したものを除いては、この地方の伝統的地狂言の最後であつたろう。当時村では警察の許可を取るべく、代表者が新城の町へ泊り込みで、警察の玄関へお百度を踏んだものだ。そのとき新城の町の宿屋という宿屋は、これら狂言の請願に来た各村の代表でいっぱいだったと言う。しかし警察ではいかにしても許可を与えない。そこで一人が思いついて、警部の一人に渡りをつけ、ひそかに交渉を進めて見ると、許可はいかにしても相成らぬが、管轄違いの土地のものがその地で鑑札を取り、村へ興行に来るならあるいは差支えないとまで、暗に一法を漏らしてくれた。なるほど旨い考えであつた。そこでにわかには喜び勇んで、許可だ許可だと、特別な恩沢でもあつたようなことを口走つて宿へ引き揚げたという。そしてただちに村へ還つてかくかくと報じたので、村ではすぐに寄合を開き、第一に役者を他へ寄留させる手筈にして、ちょうど振付の男が

豊橋のものだったところから、そこへ全部寄留させるべく、中根某が若者二名の印形を取りまとめて豊橋の町へ飛んだものである。そこで内容こそ昔に変わらぬ地狂言であったが、表面は豊橋の俳優が、二日間村へ興行に来たことにしたのである。

## <二>

なんにしても村の氏神の祭りには、なくて叶わぬほどの人気のあったことだけに、村という村で、ほとんど演らぬ土地はなかったのである。南設楽郡作手村字七窪などという村は、山の中の戸数わずか7戸の小村で、全部が炭焼きを渡世にしていたが、こんなところでも狂言を演り、それをまた山坂を越えて、遠くから見物にも行ったものである。七窪などは生涯に一度だって用のある土地ではないが、狂言見物に行き初めて知ったなどと言っている人もあった。村のある限り氏神の祭りには、狂言はかならず演るべきものという風な思想を、お互いがまだ心の奥底に持ち合わせていたのも頼もしかった。氏子の好むところすなわち神の納受し給うと考えたのはもっともなことである。現に明治三〇年頃私の村で、新調する狂言の引幕の文字が問題になった。いろいろ他所村の例を引いて詮議して、単に神楽では意味が通らぬとて、神も氏子もともに楽しむ意味で神氏楽としたなどは、その間の気持ちを如実に物語ったものであった。

神が狂言を好み給うにより、したがって氏子が狂言上手と名を得た村では、前言った鳳来寺山麓の門谷がある。同所は峰の薬師参詣の道者相手の宿屋部落であった。

次いで北設楽郡振草村の古戸〔現、設楽町〕、ここには狂言のほかに古くから花祭

りを初め操りもあった。同じ郡の段嶺村田峰〔現、設楽町〕などで、いずれも狂言地としての一方に古い田楽でも有名な土地であった。これらの土地こそ、神社との関係から、狂言とは離るべからざる因縁があったのであるが、その説明はしばらく別にして、差し当たりいわゆる狂言村と、狂言の家筋の実際について言ってみようと思う。この方が気持ちの上からも、話の順序からも都合がよいのである。狂言村

とは狂言上手の村で、家筋はすなわち系統で、別に狂言系とも言い、あるいはチャリ系、立役系などとまで、村々に系統があつて、それぞれ縁を引いていたので、仮にも上手と言われるほどの者は、この系統以外には一人だって出なかったのである。

### <Ⅲ>

ひと頃この地方の村々の狂言を評した文句があった。大野衣装に門谷狂言、長篠舞台に新城弁当、野田の薩摩芋に石田の小便、これらの村は狂言所としていずれも代表的であったが、中でも門谷は門谷狂言とまで名を取った村であった。門谷は狂言所だ、門谷は好いと言って、門谷へなら娘も遣ろう婿にも取ろうで、現にずいぶんな御大家から望んでそこへ嫁に来て、落ち着いた人もなかなかある。門谷生まれならどんなものでも狂言上手で、他所へ出て幅が利いたということから、次のような話までがもっともらしく語り伝えられた。

尾張屋の四郎兵衛という大工さんは、村ではさっぱり評判はなかったが、ある年信州の山の中へ仕事に行き、そこの狂言に仲間入りして忠臣蔵の判官を演じたが、あまり旨すぎて土地の評判を一人で奪ってしまった。それで地の衆が弱ってしまっ

て、明日からは床ゆかでも継ぐな台本たいほんも継ぐなとひそかに申し合わせておいた。これほどまでの名優でも、床か台本の介添えがなくてはいっぱし演ってはゆけなんだというところに村の狂言の特色が出ていた。そんなこととは露知らぬ四郎兵衛の判官殿は、切腹間際の大切な場面でころりと台詞を忘れてしまった。床か台本が継いでくれるのを今か今かと待っていたが、誰も彼も黙りこくっている。そこで仕様なしに「床も台本も継がぬとあらば、是非に及ばぬもはやこれまで」と言って腹を切ったが、それでもえらい纏頭が降ったという。

同じ大工さんの甚之という男も、村ではちっとも上手でなく、村に何かことある時、料理に添える芥子を搔くので認められて、甚之芥子と調法がられるくらいであったが、やはり信州の山の中へ行って、鎌倉三代記の時政を演じた。そのとき衣装をつけて舞台へ出ると、まるきり台詞を忘れてしまった。それで舞台の真ん中へ突っ立って、アアアとやっていた。するとそれを見た女房役が気を利かせて「父様いかがさしゃんした」と咄嗟に相を入れると「今日の戦にくたぶれたア」と言ってごまかしたが、それでも大変な評判を取った。

狂言所役者揃いの門谷の中でも、狂言系の随一と謳われたのは、布袋屋、松坂屋の二軒であった。現今はどちらの家も没落して、昔の大きな宿屋構えのみが残っているが、明治維新前、鳳来寺全盛の当時は、布袋屋、松坂屋と並び立って互いに勢力を張っていたのである。なかでも布袋屋の周蔵と言え、門谷立始まり以来、一と言って二と下らぬほどの狂言上手の評判を取ったもので、与一、周蔵、代三郎と、

代々門谷狂言を背負って立った家柄である。最後の代三郎が死んで五〇年にもなるから、もう大分古い話であるが、この周蔵が一年法界坊を演った時など、その凄<sup>ぶんだれ</sup>い身ぶりが真に迫って、狂言が果ててから、見物衆が門谷から追分へ抜ける分垂の谷を、怖ろしくて帰ることができなんだと言う。このときの狂言はことに役者揃いで、周蔵の法界坊の他に、山形屋与三郎のおくみ、小松屋久太郎の甚三等で、いずれも年盛り腕上手の揃いだけに、えらい評判だったのである。周蔵の芸の内では、彦山権現の六助も名高かったもので、掛け声一つ御法度の厳しい狂言に、六助見事と叫<sup>なげばな</sup>んで投纏頭をした見物があった。展いて見ると中に天保銭を重りにして、二分金が一個光っていた。包紙には信州飯田の住人とのみで名はなかった。それでそのままを記して幕摺りへ張り出したが、二分金の投纏頭は、当時他に類のないことであった。その時の六助には、かねて眼が高いとされていた山内の僧侶連中も感じ入って、千両役者もこれまでと極印をつけたという。周蔵の父の与一に関しては、ただ旨かったとだけで時代が古いだけに噂はもう残っていない。

#### <IV>

布袋屋に松坂屋と、門谷狂言を代表した一方の松坂屋には、一代男の子がなかったの<sup>ので</sup>、布袋屋から婿を取って家を継がせた。これが周蔵の弟で周松というのである。兄より一倍かっぶくもよく顔立も整っていて、立役がことに旨かった。松坂屋の松王役者と、歌にまで歌われたのはこの人である。しかし芸は兄ほどには行かなかった。「十条源氏」の物嗅太郎で「すらりと飛んだは稲荷の近所か」と言って、座ったまま葛城太夫の傍へ飛ぶしぐさが、こればかりはどうしても兄に及ばなかった。

周蔵の倅の代三郎が初めて舞台に立ったのは数え年五つ<sup>の時</sup>で、手習鑑の菅秀才をやったそうである。そのとき伯父の周松が松王で、どっち劣らぬ評判であった。雛人形のように美しい菅秀才が、回らぬ舌で台詞をやったときは、さすがに胤は争われぬと、涙をこぼして感心した。その後めきめき上達して、一二の年の盆狂言に、鞍馬山の牛若丸を演ったが、花道の出が、まるで宙を歩くとしか見えなんだという。

布袋屋、松坂屋に次いでの家系では、山形屋、柏屋、和泉屋、桔梗屋、小松屋、大黒屋などで、山形屋、柏屋は女形がよく、山形屋与三郎の伊勢音頭のお紺、柏屋の貢はこれも名題の一つであった。

家系は問題ではなかったが、島屋今吉という男があった。悪師がことによく、芸

は無類でたちまち評判を取った。前にも言った長柄長者黄鳥塚では佐々木源吾をやったが、正直なところ門谷狂言でこの男に較ぶものはないと言われた。二十幾つのおりに、江戸か上方かへ初の給金七百両の約束で買われて行ったという。それからの消息は村ではとんと知るものなかったのは不思議である。全然虚誕でもないらしいから、方面を変えて調べたらその後のことが少しは判るかも知れぬ。しかしまた一方では明治の初め頃、東海道三島の宿で雲助になっているのを見たというものもあったから何とも言えぬ。いずれにしても村へはふたたび還らなかった。門谷は猿樂から狂言時代へかけて、長い伝統の土地だったのだから、こんな人の一人くらいは出てもよさそうに思えるのである。村の「ちやり系」で通っていた小松屋という家は、式三番の黒木の尉、俗に「あたけ三番」の家系で、久太郎といった当時の主人は鎌倉三代記のおらちがおはこであった。その他では島屋今吉の弟の重吉という男なども評判で、かっぷくもよく足捌きがことに美しく、江戸や上方の見物衆まで、皆感心したというが、惜しいことに台詞を忘れる癖があって、忘れ重などと渾名を取ってしまった。松坂屋周松の倅の松三郎、為吉、丈作の三兄弟も、親の血を受けていずれ劣らぬ上手揃いで、布袋屋代三郎などととも、明治維新頃の門谷狂言の人気者であるが、当時あたかも鳳来寺の没落に会して、村は片倒しに潰れる際だったので、したがって近在回りの振付けや俳優に落ちて行った。もちろんそうなるまでには、永い物語があるのである。そのうち兄の松三郎は豊川稲荷の浄水番までして亡くなり、なかの為吉は嵐新雀と名乗り、近在回りの座頭格であった。相当に長命して、亡くなってからまだ一〇年くらいにしかならぬ。晩年の生活はことに悲惨で、死んだのはたしか名古屋の養老院と聞いた。語れば長いことであるが、門谷狂言の悲惨な末路を一人で背負わされて、如実にこれを見せて歩いたような人たちであった。もう当年評判の誰も彼も、ほとんど生きてはいなかったのである。一番末の弟は、これもひと頃奥州路を流浪していると噂を聞いただけである。なおこれらの人々の他に、明治になってから門谷狂言がおくった近在回りの俳優が二人ある。一人は長谷川某で芸名を嵐離遊、今一人は名前も何も私は知らぬ。どちらももう亡くなったろうと思うが、あるいはまだどこかの果てに、妄執のあがきを続けているかも知れぬ。こうして当年の門谷狂言も跡形もなく滅びてしまった。

## <V>

門谷から南へ山一つ越えた長篠村字長篠〔現、鳳来町〕は、あえて狂言村と言う

ほどでもないが、ひと頃長篠舞台と、舞台の仕掛けで評判を取った村である。村の久保屋という家は、今も立派に栄えているが、この家が狂言と因縁深く、舞台の仕掛けも実は先代喜左衛門の力であった。家では米穀雑貨を商っていて、明治初年頃には山の中でも店にない品はないと評判されたくらいで、気風もよほど変わっていたのである。もちろん代々の狂言好きで、その上にも舞台仕掛け、小道具等に興味があって、これに少なからぬ財を投じたのである。ある年一の谷の熊谷を演った時など、小次郎の首が気に入らぬとあって、自身わざわざ名古屋へ注文に行ったほどの執心家であった。近江源氏の高綱の偽首なども、いつの間に拵えたか見事な物がしまっていて、近在の村で近江源氏を演るたび、あちこちから借りに来たものである。鬘なども別誂えで幾組となく用意してあった。関取千両幟の鉄ヶ嶽の煙草入れなど、銀金具づくめの立派なものが、つい近頃までしまっていてあったと言うから、今でも多分残っているだろう。

それほどの凝り性でしかも狂言好きであったが実子はなかった。それでたった一人の甥を手塩にかけて、それがまた狂言狂いと言われたほどであった。体は小さかったが芸は旨いもので、一年「山門五三の桐」の五右衛門を演ったとき、葛籠を負って宙乗りになって「葛籠背負って可笑しいか、体が小さくておかしいか」と台詞をやったが、舞台仕掛けとともに、当時近在へかけて大した評判であった。また「扇屋熊谷」の小萩で、敦盛に変わるときの鬘の仕掛けなど、その芸とともに見物を魂消さしたもので、淳朴な村のものをして、久保屋はどんなことをするかわからぬと、嘆声を漏らさしめたという。

久保屋喜左衛門は商人であったために、絶えず江戸大阪と交通があったので、珍しい仕掛けなどを見て来て、村の狂言に応用して喜んでいたのであるが、甥は一図に狂言好きになって、実は近所隣のものまでも迷惑したという。家に相手の客がなくなると、畑でもどこへでも出て行って、そこにいるものを相手に狂言の身振りや話に夢中になる。それで相手も弱ってしまって、かまわず仕事に掛かると、耕作をする後や肥料をになう後を追い歩いてまで話し続けた。そんなことから伯父が分けて与えた家産は幾度となく傾けて、果てはその伯父にも見放され、幾度か持った女房にもことごとくあいそづかしをされ、身寄りはもちろん、住む家もない全くの孤独に陥ってしまった。もう昔話になったが、亡くなったのは村の人たちが作ってあてがった野中のうだつ（藁小屋）であった。しかし狂言に対する執念はまだ尽きぬとは言え、詳しく語るのも実は憚るわけであるが、じつに因果を極めた遺児があっ

て、これが他人の手に養われていた。その子が後に成人して地狂言に出たが、じつに旨いものであったという。そこで村人の誰彼が、あの人もやっぱり跡目だけは遺したなどと、さがない噂もしたのである。

## <VI>

村々にはどんなにわずかな戸数の所でも、きまって一軒や二軒くらいは狂言系と言われるほどの家があった。そうした家に世継ぎの男子が絶えて、とんだ問題を起こすことはありがちであった。名前を言うのは遠慮するが、同じ長篠の村の中に、狂言系で通った屋敷があって、その主人というのがまた特別で、平素、人と応対するにも、狂言振りであったというのだから、おおかたは想像される。

それほどの人の家へ、娘の婿に来た男が、どうした廻り合せか特別の下手ものであった。もう四〇年も前になるが、その婿が初めて村の狂言に出て、役もあろうに安達ヶ原の御殿の貞任を演った。貞任の桂中納言が、上使を果たして花道へ掛かって、にわかに陣鉦太鼓の轟くのに血相変えて「はあて怪しやな此あき御殿に陣鉦太鼓一」とやって、気がついて再び中納言の身ぶりに還るところなど、台詞といい身ぶりといい、そのだらしなさは見ているものが腹が立ってきたという。それで狂言場は見物の悪態で煮えくり返るようで、女子供などはとても見てはいられなかった。ある男などはこんかぎり悪態を吐いたところ、翌日は体が変になって見物にも行かれなんだという。

そうした狂言場の騒ぎの一方、婿の家庭では別の騒動が持ち上がって、これがまた容易ならぬことだった。狂言好きの養父が極度に憤慨して、出て行け行かぬの大喧嘩が始まった。それで隣近所のものが仲裁に入ってごった返す最中に、臨月の女房がにわかに虫がかぶって子が生まれるなどと、じつに何とも彼とも言いようのない騒ぎであった。当時どこへ行ってもその噂で持切りで、やれ狂言下手で追い出されたげな、あの養父では承知が出来ないだろ、産をした女房が血が上って死んだげななどと、途方もない噂までも立った。それで結局問題は婿が離縁になって解決したのである。こうした事実を一面から見ると、狂言系などはさまで問題にしなくなった後でも、そうして無意識の中に人々が擁護運動をやったのである。もちろんこの場合などは役割の反感も手伝って、ことさら問題を大きくした点もあったろうが、じつは狂言振りがよくなかったばかりに、すんだ後でこっそり追い出された婿はそちこちにあったのである。婿に遣った息子が、狂言に出る話を聞いたときから里

親が気に病んで、稽古が始まると兄をやって手とり足とり特別に教えた甲斐もなく、舞台へ立ったところが養父の気に入らないで、にべもなく追い出されたなどの話があった。

それとは反対に、狂言振りがよかったために、思いもかけず娘や親に惚れられて、とんだよいところへ、望まれた果報者のあったことは言うまでもない。

## <Ⅶ>

狂言系といわれたほどの家であると、狂言が始まったときなど跡継ぎの男でもないとまことに淋しかった。それでも親も望み本人も演りたいと言えば、御大家の一人娘で、平素は村の若い衆など、傍へも寄せぬ見識を持っていても、これだけには出たのである。現に南設楽郡東郷村〔現、新城市〕のある物持ちの娘で、一七の娘盛りを男の中にまじって「太閤記十段目」の初菊をやった。普通なら容易に口も利けぬのだが、狂言のお陰で手を握ったなどと、操みさおになった男が無上に嬉しがったものである。

狂言好きといっても実はいろいろあって、同じ村の中村某はもちろん狂言は好きであったが、舞台に立って演ることよりも、幕を引いたり拍子を打つのが、ただわけもなく好きであった。それでわが村の狂言だけでは満足できないで、わざわざ頼んでよそ村にまで使ってもらった。差蠟（面明かり）など手に入ったもので、どこの狂言場でもかならずこの男が働いているのを見た。

また同じ村の茨窪という一つ家などは、家は物持ちで代々の狂言好きであるが、それが不思議と上手でなく、むしろ下手以上であった。それである時出入りの木挽きが年頭の礼に行つて面食らつた話がある。初め戸口を入れて行くと、正面の爐傍に主人が羽織袴で端座している。これには木挽きも少し面食らつて、上り端へ手を突いて挨拶をするが、主人は何も言わず黙つて眼を据えこんでいる。変にばつが悪くなって、今日は皆様どちらへかとまで言うと、それまで黙っていた主人が突拍子もなく大きな声で、「母は鳳来寺へ参詣いたし、舎弟は新城へ出張仕り己れ一人此家の留守居」と狂言の切り口上だつたのに「へへへへ」と思わず頭を下げたなどと、あるいはこれは悪口であつたかも知れぬ。

この茨窪の屋敷の山続きの出沢の村は、隣村の浅木とともに、狂言村として通つた土地であつた。しかも狂言上手だという村人の大部分が、木挽きを渡世にしてい



たのも不思議である。実は昔は近くの石座神社の神楽に関係があったらしい、山の窪に展けたひどい部落である。

明治の篤農家として知られた北設楽郡稲橋〔現、稲武町〕の古橋源六郎翁なども、村では狂言系といわれた屋敷の生まれであった。代々の狂言好きで、源六郎翁かあるいはその先代時代かに拵えたという千代萩の御殿の唐紙などが、まだ家に保存されているという。今でも村の一つ話しになっている翁の逸話がある。翁が若年の頃、手習鑑の源蔵女房を演ることになって、ちょうどそのおり名古屋へ興行に来た団十郎に教を乞いに行くと、まず源蔵役の男の女房になった気で、一月世話をしてみると教えられたというのである。あるいは事実譚ではないかも知れぬが村々の狂言役者には一面大なる教訓であった。